



発行所：山口赤十字病院 内科外来

発行日：令和3年2月発行

【谷口医師からのメッセージ】



はじめまして、令和2年4月より消化管内科に赴任した谷口と申します。医師になって5年目で、昨年は九州大学病院に勤務しておりました。山口に住むのは初めてですが、自然に恵まれた風光明媚な土地で、人の気質も穏やかで、とても住み心地の良い街だと感じております。山口の地域医療に少しでも貢献できるよう日々精進していく所存ですので、どうぞ宜しくお願いいたします。

CDサークルに関してですが、クローン病の患者さんたちと医療者が、診療以外の場でふれあうことのできる、双方にとって大変有意義な場であると伺っております。あいにく、令和2年の春先より本格的に猛威を振るい始めた新型コロナウイルス（COVID-19）感染症の影響で、今年度のCDサークルの開催はできておりません。昨年度までのようにとはいかずとも、いつか本サークルの場で皆様とお話できる日を心待ちにしております。

今回は、多くのクローン病患者さんが気にされているであろう「COVID-19はクローン病の治療にどんな影響を与えるのか」について、これまでの研究で判っている範囲のことをお話したいと思います。

現時点では、クローン病患者さんと一般の方とのCOVID-19罹患リスクに差はありません。ただしCOVID-19を発症した場合、クローン病の活動性炎症がある患者さんや中等量以上のステロイド投与中の患者さん、ご高齢の患者さんでは入院率や重症化率・人工呼吸器使用率などが高い傾向がみられます。従って、寛解期の患者さんは一般の方と同等の感染防護策（手洗いうがい、マスク、十分な換気、3密を避けるなど）の実施をおすすめします。一般高齢者と比較し高齢のクローン病患者

さんの重症化リスクはまだわかっていませんが、クローン病合併の有無にかかわらず高齢の COVID-19 患者さんは重症化リスクが高いため、感染防護により気を配る必要があります。中等量以上の全身性ステロイド投与（ステロイド内服）は COVID-19 罹患時の重症化との関連が示唆されていますが、患者さんのクローン病の病勢によってはステロイドの開始を余儀なくされる場面もあり得ます。その際は、可能な限り COVID-19 罹患のリスクを下げるため、入院下でのステロイド導入をおすすめします。また、生物学的製剤（レミケードやステラーラなど）の外来投与によって COVID-19 感染リスクが増加するというエビデンスは今のところありません。

病院はどうしてもたくさんの患者さんが集まる場所であり、外来受診による COVID-19 感染リスクを心配される方もおられると思います。クローン病の症状が安定している患者さんに対しては、外出回数を減らすために、外来受診の間隔や処方期間の延長、内視鏡検査の延期を検討することが推奨されています。一方、クローン病の活動性炎症は COVID-19 の重症化リスクとなり得るため、症状の安定しない患者さんは十分な感染防護を行った上で「従来通りの外来通院、内視鏡を含む検査」を行うべきと考えられています。

クローン病の患者さんは様々な抗炎症作用、免疫抑制作用のある薬剤を使用されており、COVID-19 罹患への不安がより強い方も多いでしょう。しかし、治療の自己中断はクローン病・COVID-19 の両方に悪影響を与えるため、決して行わないよう注意してください。必ず、主治医へ相談をしていただければと思います。

COVID-19 に関してはまだ判っていないことも多く、日々不安に過ごされている患者さんもたくさんおられることと思います。クローン病と COVID-19 に関する正確な情報を取り入れ、適切な治療を行っていくことがなにより大事だと考えます。

